

目次

単行本装丁コレクション

「少年少女奇想ミステリ王国」凡例 2

〈少年少女奇想ミステリ王国〉刊行にあたって 芦辺 拓 4

人食いバラ……………5

青衣の怪人……………125

魔境の二少女……………267

すみれの怪人……………421

解説——少女と魔境と怪人と 芦辺 拓 594

解題 大橋崇行・藤田祐史 599



黒い大きな門

たのしいお正月のお休みも、そろそろおわろうとする七草の晩でした。ふりだしたつめたいみぞれにうたれながら、小さいかごをかかえて、町から町をさまよう少女。それは十五才の少女、加納英子かのこでした。かごの中には、わずかばかりの毛糸の玉がはいっています。

みなしごの英子は、しんせつな問屋のおじさんが、とくべつやすく売ってくれる毛糸の玉を、あちこちのうちへ売りあるいて、そのわずかなもっけでくらしているのです。

今しがた、あるうちへ、

「ごめんください」

と、はいつて行って、

「うるさいな。こじきとおし売りは、まっぴらだよ」とどなられ、おまけに、犬にまでほえつかれた

の門のように高くそびえているのです。そして、門のむこうに、とてもひろそうなお家のうちの屋根が、つみかさなって見えていました。

「まあ、ずいぶん大きなうち。どんな人がすんでるんだらうか。よっぽどお金もちの人にちがいない」

英子はそう思って、立ちどまって、その門をながめていました。

ところがどうでしょう。いきなりその門があいだのです。今までしまっていたその黒い門がスルスルとあいて、中からりっぱな洋服をきた、わかいい男がでてきました。そして、

「さあ、どうぞおはいりください」

と、ていねいに頭をさげるのです。英子はびっくりしました。思わずとびのきながら、

「いいえ、わたし、ただ見てただけですわ。呼鈴なんかおしやしませんわ」

と、あわててわびるようにいいました。

「いいえ、けっこうです。どうぞ、おはいりくだね」

英子は、しみじみ悲しくなっていました。

ほかの子たちのように、おとうさんやおかあさんがいたら、こんなみぞれの中を歩くこともあるまいにと思つと、なみだがにじみでてきて、つい立ちどまってしまいました。

ここは、ちよど四ツ辻で、今までお店ばかりつづいていたにぎやかな通りが、きゅうに淋しいやしき町へかわらうとするところでした。

どこからか、百人一首のかるたを読む声がきこえ、たのしそうな笑い声がながれてきます。

どっちへ行こうかとまよったあげく、英子は思いきつて、右手のくらい通りへはいりました。もうこんなに日がくれては、商売もできないから、電車のうちへ帰らう。それには、このほうが近道らしく思われたからです。

大きなおやしきならんでいるその横町を、英子がトボトボあるいて行くと、その中でも、とくべつ大きな門がまえのうちが目につきました。そのまっ黒な門は、ぴたりとしまつて、まるでお城

わかい男は、もういっぺん頭をさげるのでした。

「あの、ここ、どなたのおうちなんですか」

英子が思いきつてきいてみました。

「主人は、元男爵の向井三郎むかいさぶろうです。ごしんばいはりません。さあ、おはいりください」

英子は、なんだか頭がへんになってきました。

（わたしはみすばらしい毛糸売りのむすめ。それをこの人はちつともけいべつしないで、こんなに頭をさげている。こんなりっぱなおやしきへ、ぜひ入れという。どうもおかしい。この人、頭がくるつてるのじゃないかしら）

「ええ、ありがとうございます。でも、わたし、このおうちのかた、だれも知りませんし、用もないです。ただ、あんまり大きなおやしきだから見てただけなんです」

英子が気のどくそうにおじぎをして歩きますと、そのわかい男がおいかけてきました。

「おじょうさん。それは困ります。あなたが入ってくださいしないと、わたしが、主人からしかられ

門倉家の怪

ばけもの屋敷

「では、いよいよおわかれねえ。わたしもさみしいわ。でも、ときどきはあそびにきてくれるわね。わたし、それをたのしみにしてはたらいいてるわ。」

と、友子ともこが千春ちはるの手をにぎって、しんみりといいました。

「わたしだつてさみしいわ。はじめてひとりぼっちで、知らない人のうちにつとめるのですもの。でも、お給金がいいから、はたらいいて、ためて、こんど友ちゃんにいいプレゼントするわ。いままでの恩がえしに！」

友子と千春は、ふたりともみなしごで、この愛隣あいりん寮りょうにひきとられて大きくなりました。そして、やっ

と学校を卒業すると、しばらくいっしょに、寮の付属の託児所ではたらいいていました。ところがこんど千春に、新しいつとめ口がみつかったので、ふたりはどうぶんわかれることになったのです。

「わたし、おととい来たあの人、黒めがねかけて、なんだかずいぶんこわいような気がするのよ。」

大きなふるしきづつみをさげて、寮の門前まで出ながら、千春は、まだ友子とわかれたくないの、ぐずぐずしています。

「こわいたつて、あの人、これからあなたがつとめるご主人でしよう？」

「ええ。……でも、わたしのほんとうのご主人は、あの人のおかあさんなの。年とつて、病身で、いつもねてるんですつて。そのおかあさんのご用をしたり、本を読んできかせてあげたりするのが、わたしのしごと。でも、しぜんあの黒めがねの先生のご用もすることになるわ。」

「黒めがねの先生つて？ あの人、なんの先生なの？」

「獣医さん！ いぬや、うまの病気をみるお医者よ。でもお金もちだから、開業しないで、ただ勉強したり、ぶらぶらしてあそんだりしてるんですつて。」

「それで、あの人のごがこわいの？」

「さあ。一つはあんな大きな黒めがねかけていて、顔がよくわからないから、そんな気がするのかもしれないわ。でも、はじめてあったとき、わたしなんとなくぞつとしたのよ。」

「千春さん。それは気のせいよ。わたしたち、この寮にばかりいて、あんまりよその男の人なんか見ていないから、そんな気がするんだわ。」

こんなことを話しあいながら、ふたりは通りのかどまで出ました。むこうから、ちょうど電車が走ってきました。

「じゃあ、さようなら！」

「気をつけてね！ お手紙ちょうだい！ それから、なるべく早くあそびに来てね！」

友子にわかれて、千春は電車の客になりました。

古びたえんじのセーターに黒のスカート、それにうすいねずみいろのオーバーという、しつそなみなりですが、千春は美しい少女でした。すらりとしたからだ、ふさふさとみじかめに肩にたらした真黒な髪、色はくつきり白く、ことに目が星のように美しいのです。電車の中の客は、この美少女に目を見はりました。

おとといの朝、千春はいつものように、あずかたかわいい子どものあいてをしてあそんでいると、きゆうに主任さんによばれて、門倉重秋かどくらしげあきという黒めがねの三十才くらいの紳士に紹介されたのです。その紳士は、病身の母のあいてをする少女がほしいといって、愛隣寮に来たのです。はじめてつとめをするような、おとなしくてりこうで無口な子がほしい。本を読むのがじょうずならなおいい。こちらは母とふたりきりの家族。べつにばあやがいるから、たいしてほねはおれない。そして給金はたくさん出すという、とてもよい条件でした。紳士の身もとも確実なので、主任さんは、